

7日に甲子園球場で行われた全国高校野球選手権の1回戦で創志学園（岡山）を破った八戸学院光星。その勝利の裏には、対戦相手の投手や打者の特徴を緻密に分析する「データ班」の尽力があった。12日の愛工大

名電（愛知）戦に向け、主に投手陣を解析する3年の池田真瞳さんと鈴木成尚さんは「僕たちが相手ピッチャーの情報を丸裸にして、『打の光星』の力を引き出せば」と力を込める。（野村暹）【「光星きょう2回戦」10面】

## 甲子園初戦突破の光星 池田さん・鈴木さん<sup>(3年)</sup>

# データ班 相手投手「丸裸」

## 弱点や配球徹底分析



データ班として八学光星の打線を援護している池田さん（左）と鈴木さん。試合の動画をきめ細かく観察し、対戦相手の投手の特徴や弱点を割り出しているという

仙台市出身の池田さんは、光星の強力打線に憧れ入学。しかしその直後の夏、右肘のけがで選手復帰に1年かかると診断され、学生コーチに転向した。一方、茨城県出身の鈴木さんは、

光星卒業生の母・香織さん（十和田市出身）の影響で、小さい頃から光星でのプレーを夢見ていた。入部以来練習に没頭する毎日だったが、今年5月、練習試合中にスライディングで左膝の半月板を損傷。自らデータ班入りを目指した。2人とも、悩んだ末に「チームに貢献したい」と考えての決断だった。

夏の県大会では、光星の試合も見ず、対戦が予想される学校の試合をビデオ撮影。相手投手の一球一球をデータ化し、弱点やカウントごとの配球パターンを割り出した。打者の分析は津田勇志副部長が担当。正捕手の文元磨生選手（3年）は「データ班がいなければ県大会も危なかった。データ班のおかげで僕たちの勝ちがある」と信頼を寄せる。

3日の組み合わせ抽選会で甲子園の対戦相手が決まった後は、翌朝から創志学園の岡山県予選全5試合を12時間ほどかけて解析。相手エースの直球・変化球、内外角の使い分けの傾向を可視化した。試合は見事勝利。活発だった中軸から「データ」の通りだった。おかげで結果を残せた」と感謝されたという。鈴木さんは選手として甲子園に出たい気持ちがあったけど、チームが勝ったり、メンバーが活躍するのを見るとうれし

い」と目を細めた。初戦を終えた後も、ホテルに戻ってすぐに2回戦に向け愛工大名電（愛知）の分析に取りかかった。次も左腕の好投手が待ち構えている。池田さんは「頑張れば選手たちが結果で返してくれる。うちが得意じゃない左投手だが、球種やコースの傾向をだいたい絞れてきた。きっと『打の光星』で打ち勝ってくれる」と思いを託した。